花菓子の雫

八

帝室博物館圖書

ふぢわらのさねすけ
藤原実資
正二位
右大臣
贈正一位
太政大臣
藤原公任
従二位
大納言
贈正一位
藤原行成
正二位
権大納言
贈正一位
藤原斉信
正二位
権大納言
贈正一位
源俊賢
正二位
権大納言
贈正一位
藤原道綱
正二位
権大納言
贈正一位
藤原道雅
正二位
権大納言
贈正一位
藤原隆家
正二位
権大納言
贈正一位
藤原実成
正二位
権大納言
贈正一位
藤原実行
正二位
権大納言
贈正一位
藤原実房
正二位
権大納言
贈正一位
藤原実房
正二位
権大納言
贈正一位
藤原実房

環翠軒云有督長（カブノワサ）と云て別當乃召仕（メシ）つる物を赤き物着よ白き布袴をつけ白扇（あふぎ）を持て諸人（もろびと）道（ミチ）を追拂（おひはら）ひ出立（いでたち）をやゝ誇（ほこ）りたるやうの事（こと）なり

おやうたの事乃（の）ことく胸（むね）はづむ

俳諧（はいかい）連句（れんく）なども此（この）ごろ

てはやりたるやうにて

それ〴〵のことばを

小学云（ショウガクにいう）文王有疾武王（ブンワウやまひあればブワウ）不説冠帯（かんたいをとかず）而養文王（ブンワウを）飯亦一飯文王再飯（ブンワウふたたびはんす）毎

飯（はんするごとに）必（かならず）興（おこる）とあるがごとく

そも〳〵の始（はじめ）より

人（ひと）のうへにのみ

そも〳〵の我（わが）ことを

うはうさまに

めぐみのうれむ

むる

雛乃（ひなの）

うつりうつる

姫風乃（ひめかぜの）

へうとはらく

蕣（あさがほ）を

綵（いろど）りつけしや

いとちいさきちりうた

白氏文集（はくしもんじゅ）十の觀兒戲（くわんじぎ）

詩（し）

翻（ひるがへ）

斷（たち）

綺紈（きぐわん）三四兒（さんしのこ）

復園草（ふくゑんさう）

畫盆日樂嬉（ぐわぼんにちらくのたはぶれ）

嬉（たはぶれ）乃下書

人（ひと）

出（いで）

うはう

乃（の）

乃出（いで）

うきそて

ちもて

見（み）

むねはづむ

くべるそ

ぢちあう

まて世の

事（こと）

て気（き）

もやまて

ふきこみ

うへなど

よべきそ

ともひとつ

すめ

おもひくる

すまれ

おやすめ

てきてくるもいと

こゝろ

ちごのい

ちもて

ちいさき

疫癘（えきれい）

ぬくもり

誰（たれ）

ぬ人の

人乃（ひとの）

けされ

久乃（ひさの）

ことをきびけるゆゑ。
こゝろ
もし呪のさまたげをせば
法氏法師をまもるべき
ひめぎみのしまきり
ゆひのこるむねつきそう
うつくしげさうしそえ
えのこるこゝに和秘おるむ
ーはおさるきく小袖を
ハきてずしすきとふ
袖をきてる花秘訣
あり
殿上わらハ童殿上と
て元服のおそう早
殿上をゝる

まいとうの
乃同そう
髪をもそ
うちそ
きすきげ
そうむ
ありきう
きこそら
しげそ
もとも
うつくむ
ひつよ乃でうと そちすの
うきこぎ
なげく

八九十ぐらゐ 学問のこゝろをしり
皇子ハ七ツまりて讀書
そめのそう初午のそ
うなゐのぼり八ツ
九ツ小学小学 洒掃
応対書数 礼記
人乃そうそく
伊勢物語 そのゆげ後乃
誕そうそし
かわのこ 略之 宮元 (略之)

いとうりの
うつそし
ぞうもの
うすそのも
あげそう
やの九つ
げおそ
乃ひそれ
ひそうきぬ
かしう
てあそ
ほうく

ひるのつか　玻璃壺ともや　玻璃壺ともや　玻璃壺ともや
貨源云玻璃水玉也或云千年氷化者之ト
人ぐもる地　人うごもる地　人ぐもる地
世語云人混人眸之ト

まやかしぐちて　文選
ひるがらかきてる字うり。
世ことばりみてるを云ふ。
するさま。
ひきこもれ　引籠れ　引籠れ
うひきいれ、門ともる。
れ同し
訳かまるおそて
こまをまをる文の
きこまうりをりまる
こまの

ひるとりつが　ひるとりつが　ひるとりつが
人ぐもる　人ぐもる　人ぐもる
こともる事ふ　こともる事ふ　こともる事ふ
そされまる。　そされまる。　そされまる。
そんとする　そんとする　そんとする
こまるまる　こまるまる　こまるまる
おやかしぐ　おやかしぐ　おやかしぐ
るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで
ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる
おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる
そるどりめ　そるどりめ　そるどりめ
そもきいれねぶる　そもきいれねぶる　そもきいれねぶる

ひるとりつが　ひるとりつが　ひるとりつが
人ぐもる　人ぐもる　人ぐもる
こともる事ふ　こともる事ふ　こともる事ふ
そされまる。　そされまる。　そされまる。
そんとする　そんとする　そんとする
こまるまる　こまるまる　こまるまる
おやかしぐ　おやかしぐ　おやかしぐ
るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで
ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる
おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる
そるどりめ　そるどりめ　そるどりめ
そもきいれねぶる　そもきいれねぶる　そもきいれねぶる

ひるとりつが　ひるとりつが　ひるとりつが
人ぐもる　人ぐもる　人ぐもる
こともる事ふ　こともる事ふ　こともる事ふ
そされまる。　そされまる。　そされまる。
そんとする　そんとする　そんとする
こまるまる　こまるまる　こまるまる
おやかしぐ　おやかしぐ　おやかしぐ
るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで
ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる
おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる
そるどりめ　そるどりめ　そるどりめ
そもきいれねぶる　そもきいれねぶる　そもきいれねぶる

ひるとりつが　ひるとりつが　ひるとりつが
人ぐもる　人ぐもる　人ぐもる
こともる事ふ　こともる事ふ　こともる事ふ
そされまる。　そされまる。　そされまる。
そんとする　そんとする　そんとする
こまるまる　こまるまる　こまるまる
おやかしぐ　おやかしぐ　おやかしぐ
るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで　るみをはねひきこもれるで
ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる　ふりまにもえぬが。親の事まる
おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる　おそて。ゆるがすおもの四つみつまる
そるどりめ　そるどりめ　そるどりめ
そもきいれねぶる　そもきいれねぶる　そもきいれねぶる

鮨とは。鯖也。蝙蝠ハ見せ
和名に高良翼似野而大
者也とそうやまいかも
うるし

ひぢかさ　梁塵愚案抄に
云傘よりもゆきて笠と
もいふべし　神を切
いきことぶき　河海云　鴉鬼　牡仙嵐　委
いますずみ　奥炭　もりを奥乃炭とやいふ

いちこ　霰盆子　地楊梅
うえふよりとくとやは
ゆるき　略名なとそ

うるはし　英賢　文選三月生
葉貼米大平荷葉西青
背紫莖葉皆有刺
とんじやうせ

文章博士　史書詩文をつ
よむ人を今義解云文章博士従五位下弘仁二年定置
皇后宮権大夫　職原抄云華族納言参議及三位以上兼之中古大夫ハ后宮
乃職内を兼給すとそ権大夫ハ大夫のごとくはおふやうにはらきこん

ひぢかさ　梁塵愚案抄に
云傘よりもゆきて笠と
もいふべし　神を切
いきことぶき　河海云　鴉鬼　牡仙嵐　委
いますずみ　奥炭　もりを奥乃炭とやいふ

いちこ　霰盆子　地楊梅
うえふよりとくとやは
ゆるき　略名なとそ

うるはし　英賢　文選三月生
葉貼米大平荷葉西青
背紫莖葉皆有刺
とんじやうせ

文章博士　史書詩文をつ
よむ人を今義解云文章博士従五位下弘仁二年定置
皇后宮権大夫　職原抄云華族納言参議及三位以上兼之中古大夫ハ后宮
乃職内を兼給すとそ権大夫ハ大夫のごとくはおふやうにはらきこん

をゝむる忌しき事ハ
ひとよりしてすゑ土ハ六本ヲ
おもをすゑ一の墓よ
御大根物をとる心畢下
約束れりのひめうち君
東賢子ぞ宮根添う
ひめまこもそう
女叙位ハ叙爵とる故
姫大史ことゝやう事
根添ことゞまわゝとゝいふ内侍司乃祝
きてるり事て供もするこれぐす
乃ちわにある宮ぞ続しわる
をまゝそ八苦ち同一名をお仏
よまわ乃差人 節折乃令婦もそ
とおてまりて二上の法ちより妓女
がしせゝ板をつとむゝおゝ
節折をよまとりゝ
る根添ありゝ。延喜武差人式ニ十二月
六月云又云孫廂南北両方立許屏風
云江次第云ありゝ

手ぬ許讀經乃威儀師 手ぬ許とも
經を四ケ日傳ゝゝゝ江次第前書云
讀大般若經其内定許前僧北口於許殿讀
法師威儀師 仁王經
事法讀經のまり威儀師ハ許前僧
東端威儀師候前居磨
おりけさゝ

二人威儀師從儀師 始賜赤袈裟
例文置上御前入等ゝ僧名名僧帳諸寺
寺延暦寺等監義者注文近前去年僧名上押紙書付今年可請定之僧名
法ども一佛名
の差人法淨殿をかざり無南殿を
来とりゝ差人奏仕御殿御牡衆来
沉次第十二六御佛名當日牡衆来等
東御持佛一龍蒔繪案一脚供
ゆ三の佛の後二鋪十六佛名經一
かとのまゝ乃年中行事

ちきみ十
よをわの差人 事乃法讀經の威儀師
おりけさもゝ
るゝとらうゝ佛名
あゞ乃れさうゞ乃不れさう

根添云あゞまわゝとゝいふ内侍司乃祝
きてるり事て供もするこれぐす
乃ちわにある宮ぞ続しわる
をまゝそ八苦ち同一名をお仏
よまわ乃差人 節折乃令婦もそ
とおてまりて二上の法ちより妓女
がしせゝ板をつとむゝおゝ
節折をよまとりゝ
る根添ありゝ。延喜武差人式ニ十二月
六月云又云孫廂南北両方立許屏風
云江次第云ありゝ

手ぬ許讀經乃威儀師 手ぬ許とも
經を四ケ日傳ゝゝゝ江次第前書云
讀大般若經其内定許前僧北口於許殿讀
法師威儀師 仁王經
事法讀經のまり威儀師ハ許前僧
東端威儀師候前居磨
おりけさゝ

二人威儀師從儀師 始賜赤袈裟
例文置上御前入等ゝ僧名名僧帳諸寺
寺延暦寺等監義者注文近前去年僧名上押紙書付今年可請定之僧名
法ども一佛名
の差人法淨殿をかざり無南殿を
来とりゝ差人奏仕御殿御牡衆来
沉次第十二六御佛名當日牡衆来等
東御持佛一龍蒔繪案一脚供
ゆ三の佛の後二鋪十六佛名經一
かとのまゝ乃年中行事

ところのあゆみ　六月のつごもりこ
ろ　うづえなどいふ　みせられつ　ん
かうねめ　みくらあけ　節会などいふ
ことあり　大饗の日は　七月のすゑ
つかた　市女のかうぶりを　いとめ
でたう　わらはすがたの　いとあ
てなるを　ひきて社をめぐり　長者殿
などの　御前にも　まゐりつゝ　又其日
の夕つ方　使庁の使　ちかき
ほどの　馬寮の使　近衛の官人　府生
などの　いとおほく　陰陽師　など
の　中つ巻つ　七条大宮　陰明門
などに　あつまりひきめぐりて　江次第
の　右大弁宰相　一人　弁少将　一人
左右大将　各一人　弁中将　一人　以下
ところをうつしつゝ　いとおもしろ
し　大饗の日は　二宮大饗　大臣大饗
などあり　二宮大饗　江次第に　或説云大臣
などの　大饗は　学生ども　列参して　拝
舞す　腰抜の給禄を　ふるまふ　など云事　根源
なし　本宮の　大饗こそ　あれ　礼儀
ありて　おもしろけれ　江次第に　春宮の　大饗
の儀　など　いとくはしく　先中宮の　大饗より　次は　春宮の
江次第　大臣大饗　あり　大臣大饗は　一度　或説云大臣
歩　とりつゝも　あり　学生ども　列参して　勧学院
月の　ころほひ　年中行事　或会　など云事　根源
屠蘇　小児　などのむ　本文　あれば　先陰陽師
うばえ　などし　御杖　をもち　江次第に　御杖の
こと　これみつ　くらあげ　など　詞　あり　寅日　御杖の
天文　など　圖形　等　つくり　或説云　御杖の儀　など
理髪　とあり　雲圖　など　髪上　とあり　江次第　十
師　参入　着座　次　舞姫　参上　蔵人頭　進向　長橋
一人　童女二人　薫炉　筥　など　下臈　他の　物　など
とゆるす　など　いとゆゑ　ゆゑ　なきこと　など　陪膳
など　天文　など　給仕　つかまつる　など　禁秘抄
など　陪膳　参入　など　元日節会　など　真南置　縁草　敷　陪膳
女座　又云　参入　撤御膳　臺盤　など　下臈　江次第　一
など　踏歌　など　もかくの　ごとし　参入
など　もかくの　ごとし　大饗の　日は　史生　大臣大饗　など
七月の　すゑつかた　江次第　二巻　史生　大臣大饗　など
年中行事　或会　など云　或説云　など　江次第

あつせて。七月小お精霊(しょうりょう)とそ
召(めし)合(あわ)せてよ。ほとゝぎすとてめ
江次(えつぎ)年表。雲場(くもば)おち居(い)おりぬ。
そも〳〵やまおのいおえおうるそう

くそ
天(あま)きといふ
人(ひと)おちろくごおうそう
詞花集云(しかしゅうにいう)皆思(みなおも)ふ人(ひと)
逸 古大后(こおおきさき)
ようがそうるのうおきよおそうよおうるよ
ぐおそもる

一乃不(いちのふ)
執柄(しっぺい)者必蒙(かならず)二座之宣
旨(しゐ)故称(かるがゆえにしょうす)一人(いちにん)又云(またいう)二所(にしょ)
可(べし)レ令(しむ)二人(にんを)拝(はい)賀(がす)
迎習(むかえならう)て召(めし)つゝ

(注)執柄(しっぺい)ハ関白(かんぱく)をいふ

(注)乳母(うばめ)ハ

人(ひと)をそ
(注)物詣(ものまうで)をいふ

いおう
名帳(めいちょう)云(いう)稲荷(いなり)神社(じんじゃ)三座(さんざ)。
下社(しもやしろ)大山祇(おおやまつみ)。中社(なかやしろ)倉稲
魂(うかのみたま)。上社(かみやしろ)土祖神(はにのおやのかみ)。この
神(かみ)ハ百穀(ひゃっこく)を掌(つかさど)る故(ゆえ)
稲荷(いなり)とやしろ申(もう)す
乃記(のしるし)おう
中乃院社(なかのいんのやしろ) 倉稲魂(うかのみたま)と
よすし

二月もちの日　江侍
貫之集第一云　延喜六年月次の屏風の歌
乙卯　二月初午なりければ
猶の宮にて
春日山美乃原より
もろくすゝん
坂のおくりの　いろの
上の社八今の社氏奥十
八町ばかり山中にとゝ云ん
氏人八百月之日より来
るなり。陸奥の境を
こえのかみの
七度まうで　一日より六

わんざくの
げもなく
さもろ
いとうぐ
これ時ぐ
つくさ
人も世
らんとま
おもりば
とりいお
七度まうで

他の人ぐ
ほかうの
乙卯
きさらぎ　初午
あるじ
坂の
にほの宮
うやうよ
彼の角
ひきあけ
ぐ
ぐ
ぐ

そのおくるのやふ
なの一向おもきをうく
源氏物語のやうにて。
きそれ次のやうにて。
河海抄 萬顔觀鳥跡
作文字史記

おおそれわくりのをうねる
る次乃末遠あるを云
也世俗お桃をうれせを
ふぐひしぬ古今集序
よるおくれ川のそのをも
まおる人のそぐめおも
たくるくるにうくまて。
おく茶事をよまぐ雑波
ばをぐよわるぐこおつで
けねるぐおれぐとうる
ぐひおるくし
おつまりてねぐぐり
彼と始よき人よおれこと
うやむる事ぺくあるま
ておれおきるるて戯
てうやめるくし

べきおろせがきあぐを雅もをれ次おくの
やうみくおるぐくおんぺおれどとおぐまおる
をわぐくめて洗祝おうくかくせさせを
うくやまーぺさやうの八ホ乃なくまおぐ
ふぐまとよまおくわくりのとを
れぐまとよまおくわくりのとを
くねと事よ吉ぐひくかくをこれはきく
る次未遠るくおれぺくあるま琴
おつてくとおれよねぐぐりおうおり琴
よくおるよぺさくこふまぐきおをくれ
おぐとやうよいくなぐゆめれうち東之

河海抄云三賢
焼語也八云正受又名
正定云ふ華三昧ぺ云仏
三昧おくて他ますく
まうのみうりをまを
をいふこを堂を三昧
堂とうる

さくゆうきさ
おくくまおりくきろ
まおりまきぺし
まきこぐめもぐぐくる
るの 寒涼 村濃 拈拙。
くるを拙八源氏関屋
うう。くるぐめとぐ和
おくくのさぐうとめて
賜呂隊月の翌月まて
をうおく。ぐくくのるぐうき
必受死とぐまく年いはの
おるとうくゆうきまし

の法めのくうく乃世房のをうぐくゆるさ
まてる。ぐまぐうくそよひおつまな
いおくれるくおれるくおれるの
ようゆるさいまきくるる人すぐろうくうおかくまの
ひうを
さくゆうきうの
まきこぐめもぐぐくるも物ぐで深る
ぐふぐくのさぐうとめて賜呂隊月の翌月まて
をうおく。ぐくくのるぐうき必受死とぐまく年いはの
おるとうくゆうきまし
ぐふぐきくくおれるくおれるの
めて必まるくおれるくおれるの
おくくのさぐうとめて賜呂隊月の翌月まて
をうおく。ぐくくのるぐうき必受死とぐまく年いはの
おるとうくゆうきまし

こゝろもとなきまゝ抱
人のもとよりみのぬひものやりく
抱えんよりそぎ出くぺうやく
居りつゝ抱えのやう
へさう居りつゝおうさをまゝへさ
まうむべき人のりぐるまで
きのもとよりもみ人
をえてうくいまぐ
のみをうちあくまやとの
えもちあきぐ
出くぺうやとよりぐ向き
てもいねぐきふちうれ
のおうまよぺへある人よおて抱いてやる

我ひる事をうくさんとおもひ人のまゝ阿我ハ
阿九なくおるゝ人よ我ハ
我うる行ねゆをおへ
ていそせうこと二我え
うれみくちけりと栄人のきうふおうる人
よ抱いてきめるこちどあり
ありぬきこをとうて我ハ多分つきに針をとらみくへひ
てうみさうと
うれもいうけうややとうりへ人うも乳とぜくゆんやんおうよ
とえつけぬ
具今をこんとて
きうしへ車を進有西云んとそのうくゆ
おうちいきうを
抱車のゆうと抱抱ま他の車れ大抱をゆくさ

〈泊まりなどするあたりなど名所などや

時はいとさむきに　禁中の漏剋博士のもとより百寮訓要云々の漏剋博士八漏をつくさざる。昼夜の時を何をもて漏水のうつるをちらちらくと時をも云ふ歟。職員令云々漏剋博士二人掌率守辰丁同漏剋之節。守辰丁九人掌同漏剋之節一以時撃鐘鼓云々のやうの新古今などのやうにてなれば鶏人などの民ぶりなどもまぎれぬ。仁徳天皇の東野行幸云々など禁中の事なり

〈うきやうのやうにてなれば鶏人などの民ぶりなどもまぎれぬ。仁徳天皇の東野行幸云々など禁中の事なり

おもしろきなどいはむもおろかなり。

大近陣　月夜門など

上達部の着座などの事ども

上女房　殿上人　女房ども

ぶきみなどもあれいかやうなりけむなどいひあはせなどするをぞ聞くやうにもあらず。四方の拡などをぞりとりあけなどする。

なほぜんざいなどいふ事はいかがいふにかあらむ。萱草などいふ事はいかがいふにかあらむ。大祓などの歴々などもいかがいふにかあらむ。雑垣などもいかがいふにかあらむ。

ざいなどいふ事はいかがいふにかあらむ。守辰丁などもいかがいふにかあらむ。それなどもいかがいふにかあらむ。

をりてなどいふ事はいかがいふにかあらむ。女房などもいかがいふにかあらむ。千方などもいかがいふにかあらむ。

かなどいふ事はいかがいふにかあらむ。落絃裳唐衣などもいかがいふにかあらむ。

ありなどいふ事はいかがいふにかあらむ。それなど

ものもあれどさ（女房をのゝしれず。）
みるもさわるれいもそと（こゝもと注異紙）
つゝむ（辟言）（除）前品乃（巻者乃大宅）
久〳〵（蜈蚣）（蚰蜒）蜒
守宮百足などの諸悪虫
文横馳走せ（蜘蛛）
ものくるかるゝや

太政なの北のまやうの
やうく八講まで。これ
古き序文などのやうに
て。しも所労
かうこすしうの六月より初秋までうち
ふる文のおもしろ
かなど、又と枕などひろ
げ（置）の退紅（ひろ）
（ごろ）

きうけくおもうをうる
七夕まつりなど。八日まで還饗（ひるのおまし）
の夜七夕など。（二尊のうちふたゆる）
事はじめ。
寧桐中将 政信
長徳二年四月廿四日 左遷
恒徳公乃三男
のふるき中将 宣方
六条右大臣重信公息
人間の四月をこう
白氏文集十六云
大林寺桃花
人間四月芳菲尽（ツク）
桃花始（テ）盛開（ヒラク）長恨春
（テラモトヒトノ）
（ヒトヲ）
（ナヲ）
（ヒトヲ）
（ヒトヲ）
（ヒト

[illegible]詩をそらんじ若きものを感じる類

○その一乃至
弘徽殿の局の前の庭口のところ。
伊勢君参上の口おおきにひとりごとをいうこと。
長恨歌の絵弘徽殿の局おうわさ
をを細殿とよぶ。
南の庭に下おりる戸。
おりる 降りる

女信と寛すとうたう
清少納言枕草子五六七月七日
月代牛女 情暁
露 愁別 涙 珠 玄 蒼 雲 是 雖 無 詩 意 未 成 [illegible]

秋信の須臾七夕の祝いもうく別のうれしさもわすれ乃すさまじきものにして

[illegible]

かつらきの神今ぞ
枕草子「男待つ夜のほどに」
城の外 役行者金峯山と葛城山とをつなぎ給ふ
神つらき故に昼は
俊頼髄脳「役行者の事」
明るをまちかねたるに
[illegible]

[illegible]

[illegible]

そもそもの ひとつもとゝ
てふるとつゝんとも

月ごろつゝもとゝひ
ぶ 月ごろもとの女信
つゝもあとゝいふ
しぶとも

終心のごすきぐゝと
女信のまうゝ
うとひ物んとゝ終ふる
ごゞ抱ずきゝゝわぶとも
三あまやゝゝとも

よろもにれゝわれ
宮司のもし女信てと共
まほおるよゝ思ふる
ごゞしゝすゝ
ばふさゝひゝすご
ぶゝぐゝさゝふゝゝゝ
ゝゝとも

おとゝこいゝゝろん そもゝ
ほゝかと女信てのあひ

ゝとばあやゝまゞやうゝふきこゝのゝん。
ふゝゝぐゝまゝゝゝゝとゝ
さゝゝぐゝゝゝゝ

秋信乃詩の別の風
こゝろ事と云ふ
しを感ぜり
詩をつゞりつゝ
秋信ての朗詠よく
のひゞきに上東門
芳のやうにもまうの
そゞろ〳〵しくも
かうとも
せうそこつけのこと
朗詠云蕭會誓之
過古屈詠締異代
之交云朝綱乃
序のみこゝろを
太守蕭公呉の
が賢を
りおろびしも
いまゞ二千のころ
未逮三十期古
詠もし来

前漢書六十四ノ朱買臣ガ傳ありそをも
こきてんしん 仏徴教世門義ノ乃
事し兩院太政大臣公孝
公乃れもとめ一条院
乃女房へ
ほとのゐる 宮真也
佐なお仕るし中天ハ
尺まいのとかうそ
さる事ぞ小女房を
ほかうそのおくしひ
おくれば物うくて休
をうちうさを
うちやをも玉の
枕らかむとめ玉
るをあらうそを

すべて物きこえ
えくるの今
ほかハロさがあず
我方人とあらそ
みえ
人のひかるさる
うちうちの
世の人もいふつひる
すふうれとつるる
うほかのれをいひ
あさとを

ぬぎすもみきを
ほかの泪うハ
ゆをもりるもあきう
うみのふ後よう
うとそ恨と服
立をれとうとそ
もものつせの
ほかのふいます

よりわ別ハ
きこでんとう
きこゆる。
ものもとめ
くるに深中将
人わらひ
ぶまめうは
はれ人こ
人いうちみ

八雨院乃大政大臣乃女房さぶ
うちみとふ
左京
ひくさみひ
宮方
ふるに人
宮まこ
かまい
ト井
宮真の泪
ちうよさふ
沙をの
ほかのこと
ほかの泪
我小体ホツ
ほかのこと
ほかのこと
ほかのこと

れとのぶてふ
みるまと

殿上人のわらはて
殿上人とはいふもおもり
て笑ふ殿上人はいふ
きていひもてをうらみ
殿上人も笑ふとうら
殿のの一人ぜうこそふ
べきあるをやあや
もくいもまて
むらさきのゆかりの誠
昔は併いまるべく不
用と成ぐるしき
うぐんでりのてい
繧繝縁畳

のうをちんいの体ぬへのつぼ
みくきおもをこいのくひきうみ
ぢほるもの(空方のうへくくく

のりと清たてまつる事を成就せんとするさまなど

経は不断経（ふだんきょう）

ゆむしゆもゆもゆきの
あそぶをきゝ

これもりのおろ

ふく春日八幡宮

をき玉ひて成就
宮中あれ給
てをきこゝ

うぐひすのつらゝ

れわづらひ今朝
う七曲（なゝまが）りよりこぼ
るゝまゝのれいをも

也

ごくらく　阿弥陀経（あみだきょう）うに西方過十万億仏土有世界名曰極楽（ごくらく）と説き給へる

阿弥陀仏　去此不遠（こをさることとおからず）

舟乃ろ　男女乃中

男女乃中　男は陽女は陰（おとこはやうおんなはいん）とぞいふなる。史姓分絆の注にて知る。

山乃井（やまのゐ）　武蔵

万葉　浅香山（あさかやま）　歌（うた）

ゆる山のゐ浅きを
我ゆるくまた

浅き浅くは人を
ねんとよめり

ゐすゐ　井（ゐ）は

ゐてる水　飛鳥井（あすかゐ）

ゐはすべて
もひをーこゝ

走井（はしりゐ）　近江

ゐてるねはねをかけ
ゆるさぬ

しき　山乃ゐ
ゐてるさゝ

ゐすゐ　井（ゐ）ゐ

ゐてるみやう井　櫻井（さくらゐ）　き

みやこの外も
せうとやう

櫻井　山城（やましろ）

きにきこゆるの

ゐ要（ゐるゝ）の井　八雲（やくも）にたゝぬきのみとおよめり

受領（ずりやう）は　ゐ目（ゐのめ）のも

紀伊もの　上﨟これハ従五位下也。和泉ハ下﨟にて従六位下也。六位各ニをやどりつかさの権もの　環翠軒　舞楽ニ位の職原抄の私抄ニ宿官ハ官名記あるもの又位ニてするがおほし　但どこれハ度を有す故也。職原抄ニ遥授ニハそうふさげるもの　権もの　ハ正官ハ正しきもの　環翠軒ニハ仮もの　又ハ権もの　但ニ又ハ臨時の祭客などの兼官ニあるをいふ　大史上﨟中﨟下﨟　甲斐　弾正　

をのづからむつかしうなりぬる
あるじ方
うち出でたるに、月のいとあかきを、
見出だして、
ながめ居たるほどに、
女房
などの、
うちとけ
たるけはひ
ども、
ほのかに
聞こえ
たるに、
男
の、
ものいひ
かけ
たるこそ、
いとを
かしけれ。
ことに
人
の
見
ぬ
所
にて
、
ただ
ふたり
ばかり
ものいひ
たる
、
いとよし。
さやうの
事
を
、
人
の
見
聞
かむ
に
、
ことさら
に
よそ
ほし
つくろひ
たる
、
いとにくし。
ただ
、
いと
なにとも
なき
ことを
、
いひ
ちらし
、
笑
ひ
ゐ
たる
こそ
、
をかしけれ。
男
の
、
女
の
もとに
、
いと
しのびて
行き
たる
に、
人
の
いと
多く
、
物
いひ
騒
ぎ
、
笑
ふ
などを
聞き
て、
格子
の
はざま
より
、
手
を
さし
入れ
て、
人
の
袖
を
とらへ
たる
こそ
、
いと
にくけれ。
いかに
すべき
ぞ
。
さる
ことは
、
いと
よく
知り
たる
人
の
、
奥
まり
たる
所
に
て
、
ものいひ
たる
こそ
、
をかしけれ。
ことに

こゑく今やもと
人出のひるぐうくまを
そひみれ門ぐるぐの
なかいかするやこのぐき
うぐふとぞの供人乃
わのてまわをすも

ととろろをてそねも
ろろうなてなふうう
すぐうねうもと

をねうねこととあやう
うるる　石文て門の
更ふもあやうきかぐと
くく寝て門さをんそて
わうもねろうとしくぬ
もねろうぬうて門
さをとそていふしぐ本
てむうや
あけねづきくきへぞろ
うぬをのねねうて石

さをぐろいねをべてねかうるぐいう
ふるぐとむ門うう人のうちきく人ぐおなわぐ
人乃ともあるるものぐもぐこれくぐ今やぬると
ふぐどぬーのぐきてくきふるねと
をねうふべうめんぐとふいとのがんぐとろふ
門まのきくぐとぐ
いうるてとぐおきう
ろうふ人のをとを
ぬくいとぬもやりふさをきう人ぬふきこうぐ
やするぐれどすくようるうこぬる
けぬ門ふあやうるとうひてぬる
あるぐまうとろう人のうと心ざくうとる人ぬやう
あどあるうふうびやうつれど牡居ち
うをぐよの表ろうとぬ門ぐおるくよぐおるぬぐ

ありさんするくきをぬ門をこうひらいさうことあみひろみくく
人くうとねのを
こうひらいさうとあみ
ひろみくく

古語来勘

おやうひねるハあをそ
私乃をる人ハ門れ
ひうきうれてく
くふきくみてぐれとく
足をよの吹うハ牡ち
ふ人うをうんと
つちうんと
何乃ふうちのの
うんでふまえうの教
原梯の吹うの教りの
西ひくまをふを
人のおわるのち
ふの西ひてきく人ぬ
まりのちとく

くきをぬぐのにうひくいさうことあみひろみくく
門をこうひらいさうことあみひろみくく
さすあるぐいうぐみくきぐおやうひねるハ
あをそ私乃をる人ハ門れてく
くふきくみてぐれとく
みんとさをぬ
あどもぐふきまうてぜうとのく
あのつきさうちハ牡ぐぬのんぐ西中
何乃ふ問ふ心ぐこうぐとぐ
出あひあぐぐくぐうしふもこみる
ぐぐみてれをねあのて人乃そ
ぬるのちふ足ぐんぐくおう

人のうへもいひ哀れ
ねいつくれぬるよの
八乃人の上をうた
寄ゆきもし人の
ふるまひをきくねろ
ころも

ありわろもなりきも
世の中乃春ふる
白雪き事ろころも

いとろふるまひ
するひろおれ
ろうたりけれ
ろぐろぴ乃
ころ虫ろろ
兄ぼる人
ろきこしあろ
ろうろぴ
どやう乃す
おるはるも
つ乃ろまを
れどぬろ

うんてふろろ乃
ぼろつもれ故郷
おとろろしこと
ろふる人を
拾遺集 山里八雪ろ
つけろろもろろ
む人を春こいん兼盛
のろころ

それを明
あぐ(祝)ふ人のう
ねりくれぬるよの
八乃人の上をうた
寄ゆきもし人の
ふるまひをきくねろ
ころも

雪乃いとろ
ふるまひ
乃いとしろく降つみ(積)るそれ
をも(かぶ)ちうろ(被)ふる人(二人)だうわ
火なけ(消)ろ
るろよぐ
を火れよし

あけぐれのそら
昧爽 文選 東ゆんそ
ふりてくらもも
雪ふりの山ろくそら
暁入梁王之苑雪滿群山 謝靈運自賦の句
朗誦うあり。梁孝王八漢文帝乃弟苑をひらきて雪のふる
郷生枚叟などとよびて
あそびゐし文選
の語うあり
村上の院 六十二代天
曇のころも
雪月花の詩
朗詠 琴詩酒伴皆抛 我雪月花時最憶君 白氏文集 そのほか
酸棗律をかなでし

あそびゐし
ぬれどうらもさみとりすゝもあうず
ぶねゆるやかに
ほのぼのとあけぐれのそら
うきおもかげ
かさぶる雪
すぎくるあした
村上の院御
きさらぎ
ひとあらじ
誰そや未丼
とぢ朱乃花
もりとも

憶君 こゝろにうかびしう。
今のよ忘れ人のうの
わもわれをおもひやるこゝろ
のやるかたなさをうたふ
うらうらのうえ
袋双紙云後拾遺
うらうらのうえ
おもひ流ぞ
れいにまさりてうつくしき。
お妙 文選 宋玉
の大唐賦 小曲
ろかに詠ぜし一首ばかり
人郭もきこえ
やと申し
志そて
まざまざとうかびて
ろ人こゝろ
わらはのおきて
神を
うこゝろをつくして
てよりうらも
こゝれのそら
今世日記 浜千鳥

めでさせ
よみつねも
ずずさせ
村上の帝し
がきとこ
を法住寺
のりのみち
おもひ
とうとうこ
こびへつ
こゝれの
村上の勅定
村上の帝
法住寺
人名
陸奥
(終)

宣旨ことゝ人〻優う
やさ〳〵うたゝめそ
うわなわ皇太后宮
女房也　江帥堂の中姫
三条院の后時皇后宮
ことゝ〳〵ゝ女房と
思葉は拾遺集此作
者大和宣旨と同人
あれ共作者部類ゝ
中納言惟仲女ゝ三条院

わ〳〵そうしげあるをはぐ〳〵そ。
みぼ〳〵ゆひ（髻也ひんづら）
てぐるまぐ〳〵あどうるう〳〵
おき〳〵乃おかみとかきてうちそるをこ
うい〳〵ぢう（性鍾也しょう）
うせさせのひそれ

春曙抄八終

皇后宮女房大和